

子供服洋装化の導入と改良服に求められた機能性との関係 ——改良服について——

山田 民子*・寺田 恭子**・富澤亜里沙**・澤野 文香*

Relation to Functionality Requested from Improvement Clothes and Introduction
of Children's Wear Western Clothes Making
: A Study on Improvement Clothes

Tamiko YAMADA, Kyoko TERADA, Arisa TOMISAWA, Ayaka SAWANO

1. はじめに

我が国における『着物』は、日本を象徴する代表的なものの1つでありこの『着物』には、伝統的な技術が結集している。素材をはじめ、染め、織り、文様、絞り等に日本独特の繊細で高度な技術がある。又これらの技術は、その時代に合うように改良されてきた。

『着物』の歴史は長く、古墳時代の埴輪・土偶からも着物の形状がみられる。しかし、現代の『着物』のほとんどは江戸時代に生まれ、染織技術も深み・味わい・精緻さの点では、比類ない発展をとげたとされる。

長い間、『着物』には、身分の階級があったが、日常着として用いられていた。しかし、現在では、日常的な衣服では無くなってきている。理由として考えられることは、若い人の体型が着物向きではなくなっていること、ライフスタイルが変化してきていること、さらには、洋服が簡単にいつでも手に入ること等があげられると考えるが、フォーマルな場では、式服として、また日本の文化である茶の湯等の場では、着用されることが多い。また、「アンティーク着物ブーム」の到来により若い人が「日常のおしゃれ着」として着用したり、夏のお祭りや、花火大会等のイベントには、浴衣を着用しているが特別な時に着るものに変化してしまっている。

『着物』は、保管するのに便利という利点はあるが、縫うことも着用することも容易なことではなく、熟練や、工夫が必要とされる。着装の仕方は、時代によって異なるが、平面的な構造の衣服を、複雑な曲面の体に巻いて固定するという着装の仕方はいつの時代も同じである。現在の和服は、晴れ着という観念もあって、美しく着るという着装が成立している。

幕末から明治初期のころの女性の着物の着装の仕方は、胸は、くつろげて、おはしよりも緩やかに、肩は落とし気味に袖で手を包むような着方が、着物らしい着方であったようである。

しかし、明治期、日本の近代化に伴い従来の着物よりも活動的・機能的な衣服の必要性について

*服飾美術学科 服飾造形第2研究室 **服飾美術学科 服飾造形第1研究室

多くの議論がなされ、時代の流れに対応した、新しい考案服を生み出そうとした運動が生まれた。これが、明治期の衣服改良運動の始まりである。

この運動の推進者は、寺田勇吉、下田歌子、三島通良、加藤錦子、山根正次、渡邊辰五郎等で、教育者、医者等の知識人が主体になっていたと考えられている¹⁾。

衣服改良の必要性は、1. 衛生問題 2. 女性の運動・体育の必要性 3. 経済性 4. 国際性 の4要素があげられ、衣服改良の主な動機となっていた¹⁾。

改良服は、着物をもとにして、より活動的な「改良服」を考案する動きと、そのような段階を経ずに、機能性に優れた洋服を取り入れる動きとがあった⁶⁾。

校祖・渡邊辰五郎は、明治14年に和洋裁縫伝習所を創立したが、翌年の明治15年には、衣服改良に着手し、明治19年には、「衣服改良会」を組織したと郵便報知新聞10月30日号に報じられている²⁾。

本学の博物館には、渡邊辰五郎によって考案された改良服の雛形がある。主なものをあげてみる。

- ①婦人改良服：和服の優美な美しさはそのままに、より機能的に改良されたもの。
- ②改良被布女物：和服の被布に比べ、身体にあった動きやすい作りになっている。
- ③女股引、女猿又：改良服の下に身につけるもの。従来の和装下着である「腰巻」は、保温性が低く裾が乱れやすいという理由から、作成されたものである。
- ④医師の改良服：袖口の紐をしめると、袖が邪魔にならないように工夫されている。明治32年ころ、弘田医学博士の依頼により、辰五郎が実物を製作した。
- ⑤看護服：婦人改良服によく似た形状のものであるが、明治27年日本赤十字社が制定した看護服は、洋服型で看護服の一般的なスタイルとなったため、看護服の改良服は、洋服型が多い。
- ⑥改良袴：体操や遠足の時に着用された。普段は、通常の女袴と同じくスカート式だが、内側のボタンをかけると脚が左右に分かれ、さらに裾の紐を占めると、丈の長いブルマのようになる。辰五郎の長男 茂が明治35年留学中のニューヨークの学校で目にした体操スカートに想いを得て帰国後作成したとされる。

そのほか、明治の後半に作成された、子供用の西洋前掛けや、女兒簡単服、子供用の運動シャツやズボン、男女の海水浴着、紳士服では、礼服の燕尾服、フロックコート、モーニングコート等があり、また、婦人服では、バッスル・スタイルのドレスがある。早くから、洋服の仕立てに通じていたことがわかる。また、改良服は洋服につながるという考えを持っていたと推測できる。

著者らは、渡邊辰五郎考案の雛形にある婦人改良服の復元を行い、改良服の必要性や改良服に求められた機能性等について研究を行うこととした。さらに子供服との関係についても研究を行う。

2. 日本の『着物』の歴史

日本の着物は、長い年月をかけて、気候風土や生活の中で培ってきたものであり、その時代の社会環境の影響を受けながら発展してきた。

現在までの『着物』について時代ごとの特徴をあげ、なぜ『改良服』が必要とされるようになったのか検討する。

2.1 古墳時代

古墳時代の服装は、埴輪や土偶からみられる。

男性：衣袴といわれるもので、「衣」といわれるブラウスに、下には「褌」を付け脚結といわれるくり紐で膝の下を結んでいた。特徴は、前合わせ式になっており、左前に襟元を合わせて一か所を紐で結んでいた。現在の洋服に似ている。

女性：衣裳といわれるもので、「衣」の下に「裳」と呼ばれる長いスカート状の下衣を用い、ウエストに倭丈織の帯を締めていた。

2.2 飛鳥・奈良時代

飛鳥時代に仏教が伝わり唐式服飾や染織が使われるようになった。衣服令が定められ身分階級に従い礼服・朝服・制服が決められ衣服の組み合わせや、色目も階級により決められていた。

男性：頭に冠をかぶり、詰襟式の盤領の長いほうを着て腰には、革帯を締め下袴をはいていた。

女性：両袖の長い短衣でこれに裳を1、2枚はいていた。

農民の衣服³⁾：山根は、持統天皇時代の農民の衣服が改良の目的にかなっているとしている。図1に示す。腰から下に着る着物は、モーバーと言われ、現在でも着用されている。また、養老の滝の番人や女人の山行の時に着るもの等代々伝えられているものもある。

2.3 平安時代

平安時代は、日本の服装の中でも一番美しく複雑な時代であり、日本独特の色や形が出現した時代である。日本の風土に適した着物が作られるようになった。服の素材は、貴族社会では、絹が中心であった。

男性：束帯や直衣という服装をしていた。

女性：十二単衣や小桂、正式には、女房装束とか唐衣装束と言われた。上流階級の晴れ装束で有名であるが庶民は、麻の小袖で紐帯をしめていた。



図1 古代の日本服

2.4 鎌倉時代

鎌倉時代は、武士が主役になる時代で服装は、簡素で活動的なものになった。

公家：平安時代に略礼装とされていた直衣が礼装とされ、十二単は五枚重ねの五つ衣となった。

武士：狩衣や水干が礼装になり、日常着には前時代、寝巻として用いられていた直垂が格上げされ

た。

女性：小袖（肌着）が変化し、白小袖が考案され色や模様のあるものが用いられた。

上流婦人の外出：つば装束に垂衣をかぶり、髪は下げ髪であった。外出の時には、かけ帯を胸元にかけ守り袋を下げていた。この時代に髪を結う習慣ができた。

2.5 室町時代

現在の着物の基礎ができた。

男性：直垂が武士の礼服であり、裾を長くした長袴を身につけていた。家紋の習慣ができた。

女性：小袖が表着となり、下級女官は、小袖袴や小袖湯巻を腰に巻いていたが帯はなかった。

オランダ人やポルトガル人が来朝したことによって更紗やビロード、繻珍など多種多様の染色品が輸入され、染色技術の発展に大きな役割を果たした。

2.6 安土・桃山時代

現在の着物の形状をつくりだした時代で、着物の確立時代である。小袖が下着から豪華な衣装として登場するが、帯はなかった。片身替りや肩裾模様の衣装が生まれ、現在の訪問着や留袖の原型ができた。朝鮮から組み紐の技術が伝わって、唐糸で組んだ名護屋帯が登場した。それを腰に幾重にも回して結び、主に遊女、湯女が使用していた。

武士：直垂・大紋・素襖が主流となる。

平常着として、公家・大名・中間に至るまで袴が用いられた。

2.7 江戸時代

現在の着物のほとんどが江戸時代に生まれたとされる。

帯：帯は、幅が広くなり、一人では結べなくなり、着付け師が登場した。帯は、どの位置で結んでもよかったが、次第にミスは後ろ、ミセスは前で結ぶようになった。たつみ芸者の登場によりお太鼓結び、帯揚げ、帯締めが初めて登場する。

着物：丈が長くなり、おはしよりが出てきた。

髪結いが始まり、島田などのいろいろな髪型が生まれ、髪飾りも生まれた。

武家の女性：打掛姿

武士：袴が定着した。

2.8 明治時代

明治時代は、和様折衷であったが、まだ女性は、着物を着ていた。男性は、一部洋服を着ていたが、正装は着物であった。

女学生：髪は、洋髪に結い上げ大きなりボンをつけ、矢絣の着物に女袴、編み上げブーツをはいた姿が流行した。

帯：八寸帯や丸帯が主となり、お太鼓結びが定着した。丸ぐけや色彩豊かな帯締めが、登場し、帯揚げも色物が多くなった。

衿元に花を添える、刺繍衿が流行し、羽織も一般に定着した。

着物の形は、上流社会も庶民も同じものとなった。

2.9 大正時代

洋装化の時代に入り、特に男性の洋装化は目覚ましく背広が流行する。女性も洋服を着るようになった。

男性：茶色の逢紋羽織、銘仙縞、大島紬が流行した。

女性：鮭色や紫のぼかし染の派手な羽織や道行コートが出現した。

2.10 昭和時代

第2次世界大戦中は、国防色の上下服、筒袖の着物にモンペスタイルであった。終戦後、洋装が日常生活に浸透した。一方、和服は、色彩が淡くなり日常的ではなくなってきたが、和服独自の魅力が際立ってくるようになった。

2.11 平成時代

着物は日常的な衣服ではなくなってきたが、着物の美しさや、素晴らしさが見直されるようになり、日本独自の和服を楽しむ人が増えてきた。

3. 明治期の衣服改良運動

衣服改良運動の推進者の6人・寺田勇吉、下田歌子、三島通良、加藤錦子、山根正次、渡邊辰五郎について特徴を述べる¹⁾。

3.1 渡邊辰五郎の改良運動

渡邊辰五郎は、明治15年に「改良服を考案する会」を設立した。設立した目的は、いかにして着物を機能化させるかという点にあり、実際に着用するための改良服考案に終始した。西洋の服装を我が国の風俗に合わせ、その背景の中で機能性を考えながら、審美性を壊さないように衣服の改良を図った。さらに、適当な教師を選出し、この縫製技術を教授することを目的とした。明治32年頃には、弘田医学博士から依頼された医師の改良服を考案し辰五郎が自ら実物を製作した。明治36年には、『婦人改良服裁縫指南』を記し、改良服の裁ち縫いを詳細に教授している。さらに学校教育において、改良服の実物製作に取り組んでいる。渡邊辰五郎考案の婦人改良服を写真1、2に医師の改良服を写真3に、改良服の下に用いる下着を写真4、5に示す。すべて授業の中で学生が製作した雛形である。

写真1の婦人改良服の特徴は、腰丈の上衣にスカート状の袴で2部形式のものである。袖は、筒袖になっており襷を取りながら、袖口をつぼめりボンでまとめている。幅広の帯は、胸を圧迫し不健康なうえ、締めるのに時間がかかるので、帯をなくし袴の紐を腰で結ぶようにしている。帯をなくしたことにより簡単に着られ、圧迫感が軽減された。着物の裾は、狭くて動きにくく、乱れも気になるので足さばきが楽なブリーツの入った袴になっている。写真2の婦人改良服は、ワンピース形式となっているが、袖口は写真1の改良服と同じ作りになっている。写真3の医師の改良服は、袖口の紐を締めると袖が邪魔にならないように工夫されている。



写真1 婦人改良服（2部形式）



写真2 婦人改良服（ワンピース形式）



写真3 医師の改良服



写真4 女猿又

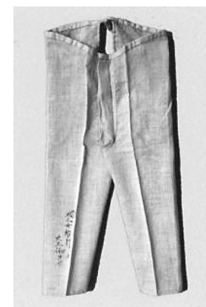


写真5 女股引

3.2 山根正次の改良運動³⁾

山根正次も明治20年頃より衣服改良に取り組んだ。山根は、医学者であり明治20年代より欧州を2回視察している。明治33年、欧州の万国体育会に出席した折に、欧州においてもコルセットの使用による弊害が、体育上の大問題となって、婦人の衣服改良が叫ばれていることをつぶさに見聞し、帰国後年来の構想をまとめて改良服を試作した。試作したものは、家族に着用させたり自らも着用し、さらには、友人たちにも進めて着用実験をしたところ、好結果を得たので自信を持って世に普及することを願った。写真6、7に示す。



写真 6



写真 7

山根は、医学的な立場から、「女性の骨格を強壮ならしむる上から衣服改良を唱えることは、家庭の責任」としている。和服の弊害として1. 袖の長さ、2. 裾の重さ、3. 帯の幅が広くて重いこと、4. 細紐の多いこと、5. 履物の重いこと、6. 髪飾りの重いこと 等を挙げ着用上の問題点を指摘している。これらは、いずれも体の運動を妨げ、体の発育を障害するものであるとしている。又、「日本の古来の衣服ではなく、徳川時代の半ばに作られた風俗で、いわば遊び女の服装である。」さらに、「亡国の基をなした衣服である」というような極言まで飛び出している。

図2、図3は『改良服図説』（明治35年発刊）に掲載された改良服である。

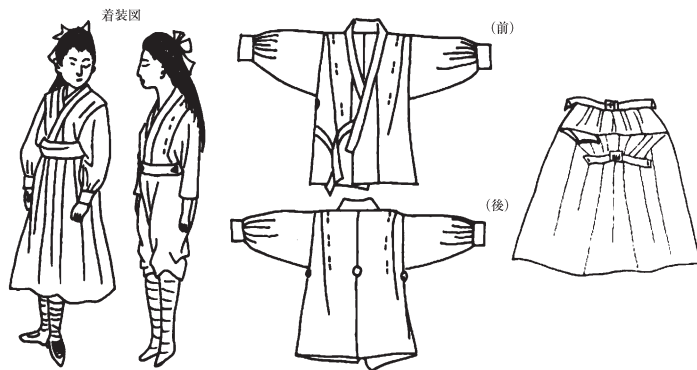


図2 婦人改良服



図3 男子改良服

従来使用の和服・男女服には、有害なものがあるとし、これらを改良するのは、当然のこととしている。体の運動を妨げるものの弊害は、学業まで影響すると考え、一刻も早く男女学生より始めることを進めていた。

「生徒の発育を良くするためには、1日も早く小学校に改良服を断行しなければならないと思う。1日遅れれば、1日の損になる」というくらいに、改良服の導入を早急に考えていた。これらの考案服はすべて製作し、家族に着用させ、着装写真および着装手順等も掲載している。山根は、早期に西欧文化に触れていたが、和服を土台とし和服の機能上不都合な点を配した衣服が改良服であるという考えに立っていた。被服構成の特徴は、筒袖であり、上着の丈、袴丈を短くした点の特徴だが、袴の裾揚げ、肩の揚げには、着物的構造が残る。袴の裾揚げ、肩の揚げについての解説には、子供の成長に伴い少しずつ揚げをほどこして着用させることができると記されている。さらに、山根の求める衣服形態は、1. 運動のし易いこと 2. 身体を束縛しないこと、3. 誰にでも簡単に縫製することができるもの、4. 布地は、日本の織物でできること、5. お金が多くかからぬこと としている。しかし、山根の考案服は、形態が図示されているものの、縫製方法についてはふれていない。これらは、縫製方法以上に、いかにして統一的な日本独自の衣服形態を考案するかに力を注いだ結果であると考えられる。標本を示したものと考えられた。

山根の改良服に着物的構造が残る理由は、西洋服も日本服もともに数千年の歴史があり、人の着物として用いられてきたので人間の体の形に従って造られている。そのため、全く異なった形のを提案することはできないという考えで、着物を用いて改良している。

また洋服の仕立て方となると、面倒で誰にでもできるものではないので仕立て方のわかっている着物を用いた方が良いという考えもあった。生地については、日本の気候に合ったものを用いるべきであり、洋服を着るとなると羅紗とかセルとか外国から買わなければならないので、自国で調達できるものを用いるというものである。そして運動がよくでき、着るにも、脱ぐにも自由で洗濯も容易にできる着物を用いた方が良いという考えであった。

改良服は、保守的な考えの大人の人たちは容易に受け入れることができないのでまずは、小児から始めるのが良いと考えていた。ここに子供服洋装化の導入が見られる。

3.3 寺田勇吉の改良運動

寺田勇吉の改良服への取り組みは、女子の健康を増進させるための方法としてあげている。婦人が自らの力により衣服改良を志している点が特徴である。特に女教師の積極的参加を訴えている。しかし生活の仕方を根本的に改良しない限り、衣服の改良も難しいとしている。畳の生活を廃止し腰掛生活をするのができたら、洋服に近い女服を作ることができるとしているが、これを改めるのは無理とし、一種の外出着を作ったらよいのではないかと提案している。外出着に改良服を用い、着物は、家で着るという提案である。現状の生活の中で改良服がどのような場合に活用できるかという視点で考えていた。

3.4 三島通良の改良運動

三島通良は、学校衛生の第1人者として活躍していたが、特に女子体育の振興に力を注いでいた。三島の女子体育に対する見解は、「女子の健康は、国家の健康なり」（婦人衛生会雑誌・明治24年10月9日号）とした国家意識に基づくものであった。この論考の中で三島は、男子に比べ、女子の死亡率が欧米諸国と比較して我が国は高いと指摘している。その原因として、衛生上の問題をあげ、改良服の必要性を唱えた。改良案としては、「運動に先立ち軽い衣服とやわらかい帯をつけ、玉たすきをかけ裾を端おる」というもので衛生に重点をおいた改良を目指していた。しかし、究極の目的は、衣服改良を通して新しい時代に対応すべき良妻賢母を生み出す点に力がそそがれていたと思われる。これは、国家富強の精神に基づくものである。

3.5 下田歌子の改良運動

下田歌子も三島と同様、国家主義的な立場から改良服に取り組んでいた。自ら積極的に改良服を考案し制服として実用化した点が特色である。しかし際立った考案服を求めていたのでは無く広い帯をなくすこと、袴を着用すること、被布様のものを着用することというものであった。

3.6 加藤錦子の改良運動

加藤錦子も積極的に衣服改良運動に加わったと思われるが、加藤が具体的に求めていた改良服については不明である。

明治期の衣服改良運動の推進者は、医者、および当時海外へいち早く留学した学識者、女子教育者であり、これらの人々が中心となって進めていた改良運動であったが、理論が先行していた点があげられた。

明治期の衣服改良運動に求められていた改良服は、明治初期は、洋装をそのまま取り入れることに対する衛生上の問題から検討されていた時期である。明治19年から21年にかけて、洋装の是非が論考の中心になっており、特に鹿鳴館のバウンススタイルの衣装のコルセットの害があげられていた。

明治21年の後半から35年に至ると和洋折衷、または、和服を基本として日本独自の改良服が求められた。

渡邊辰五郎は、教育者であり、明治30年3月に「裁縫教科書」を発刊した。明治32年までに発刊された教科書は3冊になるが、共通している点は、洋裁を理論的に紹介したに過ぎず、実際の製作方法や、技術的内容には、ほとんど触れられていない。このことは、明治32年以前では、学校教育において、洋裁の実技指導をする必要性はなかったといえる。また、婦人の洋服に対して排斥の姿勢が見られたことも、大きく影響を及ぼしていると考えられる。

明治40年になると洋裁に関する書物、特に子供服を中心にしたものが出版された。婦人服よりも早く、子供服の中には、改良服＝洋装という考え方が生まれてきたのではないだろうかと推測できる。

衣服改良運動は、和服から洋服に移行する過渡期に行われたもので日本における洋装導入過程の通過点であったと考えられる。日本人の伝統ある文化の中に、異文化をどのように解釈し、取り入れていこうとしたのか葛藤がみられた。

実際に改良服の考案を土台として洋装の普及に取り組むのは、大正時代に入ってからになる。

4. 渡邊辰五郎考案の婦人改良服の復元^{4) 5) 6) 7)}

重要有形民俗文化財「渡邊学園裁縫雛形コレクション・下巻 個別資料篇」⁷⁾ から、明治38年に製作された「1口63 改良服女物」「1ハ3 改良袴」の雛形（実物の7/20）の復元を行った。改良服の上衣は衿仕立て、袴は前後布ともに二枚接ぎで裾布付きである。明治36年の教科書「婦人改良服裁縫指南」二尺幅の項目を参考にした。

4.1 用布の地質

用布はキャラコ、メリンス、紋毛織子、カシメル、絹セル、アルパカ等を用いると記載されていたが、改良服の復元には、表地に木綿布40番を使用した。裏地、腰あて、布袋、袴止め紐、三つ衿芯、帯芯には新モスを帯芯の厚紙には帯芯地を使用した。

4.2 用布の復元

改良服復元に用いた布地の柄は、雛形に用いられていた布地の柄をスキャンし、色を調整して木綿布40番にプリントアウトしたものをを使用した。

4.3 仕立て上がり寸法

仕立て上がり寸法は、雛形の各寸法の採寸を行い、採寸した結果に $\frac{20}{7}$ をかけ求めた。表1に示す。単位はcmを使用した。

表1 仕立て上がり寸法（単位 cm）

上 衣		袴	
袖 丈	26.0	帯 下	90.0
袖 口	26.0	後腰幅	40.0
袖 幅	49.0	後寄せ襷	上 4.9
袖付け	26.0		下 9.5
身 丈	74.0	前腰幅	40.0
衿 丈	71.5	前寄せ襷	上 4.9
衿肩明	9.1		下 9.5
脇 明	6.3	帯	幅 7.0
肩 幅	22.5		丈 80.0
後 幅	22.5	紐	幅 4.0
前 幅	19.5		丈 73.0
衽 幅	12.6	止め紐	幅 3.0
合襷幅	11.7		丈 150.0
衽下がり	15.7		
抱き幅	15.7		
衿 下	15.5		
衿 幅	上 5.7		
	下 7.6		
馬乗り	9.5		
紐	幅 2.0		
	丈 43.0		
紐付け	肩山から 44.0		

4.4 裁ち方

4.4.1 裁ち切り寸法

上衣

裁ち切り袖丈＝仕立て上がり袖丈＋袖下縫い代3cm

裁ち切り袖幅＝仕立て上がり袖幅＋袖口下縫い代・袖付け縫い代3cm

裁ち切り身丈＝仕立て上がり身丈＋裾縫い代2cm

裁ち切り身幅＝仕立て上がり身幅＋背縫い代・脇縫い代3cm

裁ち切り衽下がり＝仕立て上がり衽下がり－3cm

裁ち切り衽丈＝裁ち切り身丈－裁ち切り衽下がり 12.7cm

裁ち切り衽幅＝仕立て上がり衽幅＋衿下縫い代・衽付け縫い代3.5cm

裁ち切り衿丈＝（裁ち切り身丈－衿下＋余裕15cm）×2

裁ち切り紐丈＝75cm

裁ち切り紐幅＝（仕立て上がり帯幅＋1cm）×2

改良袴

後布丈＝帯下＋上下縫い代3cm

前布丈＝帯下＋上下縫い代3cm

後布幅・前布幅は二尺幅の布を基準にした。

帯丈＝胴囲＋縫い代（6cm）

帯幅＝（仕立て上がり紐幅＋縫い代1.5cm）×2

総用布は布幅85cmのものを丈640cm使用した。

4.4.2 裁ち方図

表地は、裁ち切り袖丈四丈、裁ち切り身丈二丈、袴の前・後布丈四丈を取り、残りの布幅から裁ち切り衤丈二丈、裁ち切り衤丈一丈、裁ち切り帯丈一丈、上衣紐四丈、袴紐二丈、見返し布丈一丈を裁断する。次に裏地から裁ち切り袖幅（横布）四丈、裁ち切り身丈四丈、裁ち切り衤丈一丈、腰あて、袋布、袴止め紐を裁断する。図4に示す。

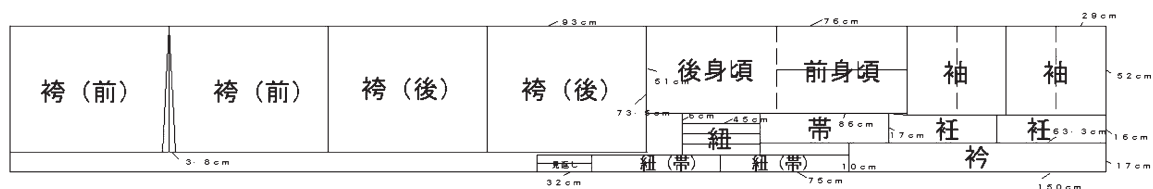


図4 裁断図

4.5 しるし付け

4.5.1 上衣

4.5.1.1 表袖・裏袖

表袖・裏袖のしるし付けは、左右の表袖を前後中表にしてそろえ、袖山を左手に、裁ち目を右手に、袖口を自分の向うに置き、袖丈、袖口縫い代のしるしを付ける。自分の方の布の輪に山印を付ける。次に裏袖を表袖と同様にそろえて置き、袖山の接ぎ代1cmのしるしを付ける。その位置から裏袖丈は表のしるし丈－0.2cmでしるしをつける。

図5-1に示す。

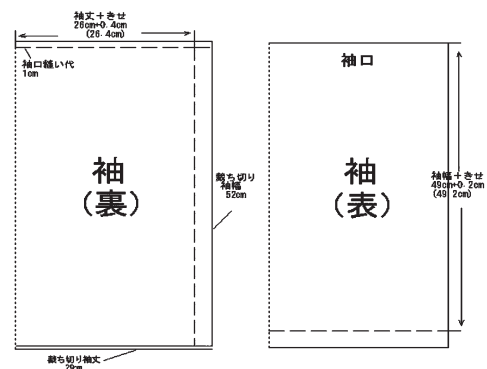


図5-1 袖のしるし付け

4.5.1.2 前身頃・後身頃

前身頃・後身頃のしるし付けは、左右の表身頃を中表にし、後身頃を上前身頃を下にして、衤肩明を自分の前に、裾口を右手の方にそろえて置く。身丈を裁ち揃えて衤肩明を開け、身丈、背縫い代のしるしを付ける。自分の向こうで左より右に袖付けと脇明のしるしを付けて、裾口から左に

馬乗りのしるしを付ける。肩幅と後幅、山印を付ける。前身頃に前幅、衿下がりのしるしを付ける。この2点を結んで衿付けしるしを斜めに付けて、衿付け寸法を採寸する。次に裏身頃を表身頃と同様に中表に置き、同様にしるし付けをする。ただし身丈は表のしるし丈－0.4cmのしるしを付ける。馬乗りの間の後幅は表のしるし幅－0.2cmの幅を付ける。図5-2に示す。

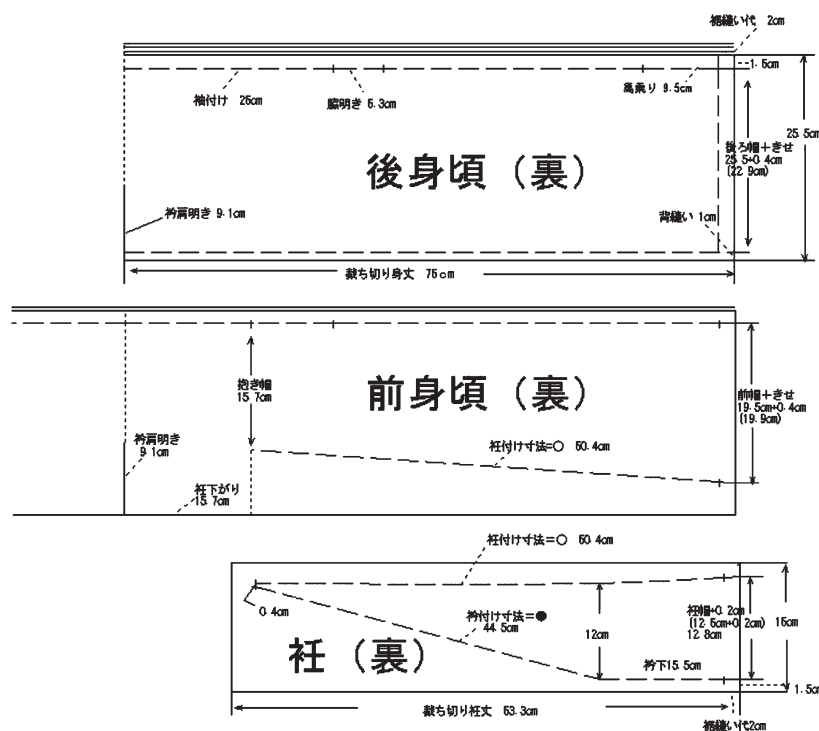


図5-2 身頃・衿のしるし付け

4.5.1.3 表衿・裏衿

衿のしるし付けは、表・裏の衿をそれぞれ中表にし、表衿を上、裏衿を下にして、衿下を自分の方に裾口を右手に4枚揃えて置く。裾を裁ち揃えて、前身頃で採寸した衿付け寸法をしるし、裾縫い代、衿下寸法、衿下縫い代のしるしを付ける。裾で衿幅、衿下で合襷幅を取り、2つの幅を結び衿付け線を付ける。衿付け寸法の所で0.4cm下にしるしを付けて、衿下と結び衿付けしるしを付けて、採寸する。図5-2に示す。

4.5.1.4 衿

衿のしるし付けは、中表に幅を折り、次に丈を二つに折って、衿丈の中央を左に、幅の真中を向こう側に置く。採寸衿肩明 + 0.5cm、衿下がり + 0.2cm、衿の衿付け寸法を手前側の布端に付ける。衿丈の真中から採寸衿肩明 + 0.5cmの間は衿の輪の方から裁ち目の方へ衿幅5.7cm、衿先の所で輪の方から裁ち目の方へ衿幅7.6cmを取り、この2点を結んで斜めにしるしを付け、山標を付ける。図5-3に示す。

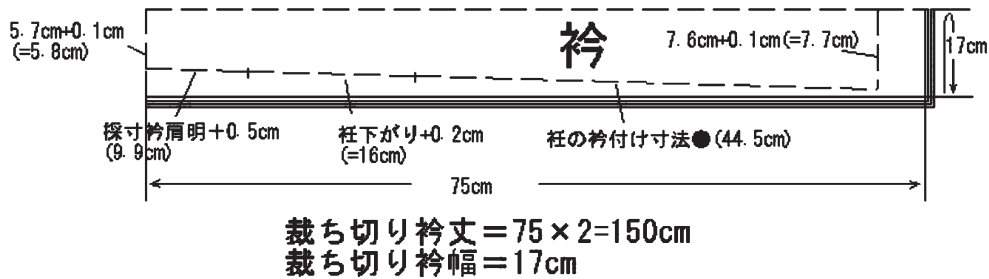


図5-3 衿のしるし付け

4.5.1.5 上衣紐

上衣紐は、紐幅6cm、丈45cmを4枚用意して、幅を中表にして置き、紐幅のしるしを付ける。

4.5.2 袴

4.5.2.1 後布・前布・裾布

袴のしるし付けは、後布は、中表にして中央を手前に、裾を右にして平らに置く。後布の縫い合わせ代を手前から1.0cm、向こう側の布端から脇の縫い代1.0cmのしるしを付ける。次に裾布のはぎ合わせ縫い代1cmのしるしを付ける。裾のはぎ合わせ標から紐下寸法を測ってしるしを付ける。脇のしるしより、9.7cmの襷山を決めて裾から上まで真直に糸しるしを付ける。このしるしから11.5cmの襷山を決めて裾から上まで真直に糸しるしを付ける。次に中央から脇縫いの方へ8.7cmの襷山を決めて、裾から上まで真直に糸しるしを付ける。残りの布幅を二等分したところに、裾から上まで真直に糸印を付ける。中央から一つ目と二つ目の襷山から脇縫い目の方に、帯下位置と裾口で上下の寄せ襷幅を測って糸しるしを付ける。脇から二本目の襷山から脇縫い目の方へ10cm測り、帯下30cmの所から斜めにしるしを付ける。

前布は、後布と同様に布を置く。右手手前の前中心の裾から前切り上げ寸法3.8cmを測り、脇縫い目の布丈いっぱい所と斜めに結び、裁ち落して裾口の形を付ける。後布と同様にしるし付けをする。

次に裾布として新モス半幅、丈147cmを2枚用意する。後裾布用として丈を中表に置き脇縫い代1.0cm、裾縫い代1cm、上部衿付け代1.5cmの印を付ける。前裾布を中表に丈を二つに折り、前中央で前切り上げ寸法3.8cm取り、脇の布端と斜めに結び裁ち落して裾口の形を表前布と同様に付ける。後裾布と同様にしるし付けをする。図5-4に示す。

4.5.2.2 帯布・袴紐

帯布は、丈を中表に二つに折って置き、帯付け縫い代1.5cm、その位置から帯幅の2倍にしるしを付ける。中心から二分の胴回り寸法のしるしを付ける。

紐布幅10cm、丈75cmを2枚用意して、幅を中表に折って、紐幅のしるしを付ける。

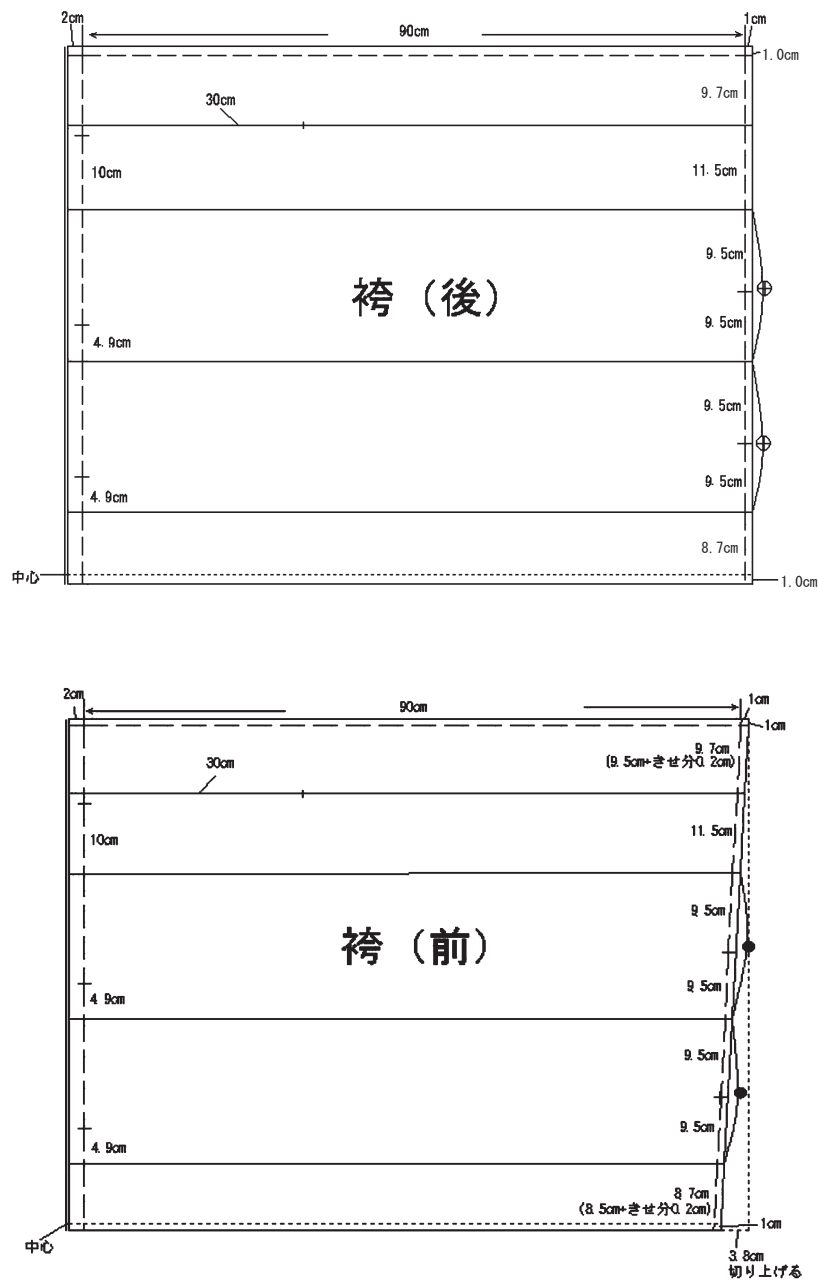


図5-4 袴のしるし付け

4.5.2.3 腰あて・布袋・袴止め紐

腰あては、腰あての布を中表に置き、幅と高さをしるし、左右の下角を丸くしるしを付ける。次に布袋の布を中表に置き、幅と深さをしるし、左右の下角を丸くしるしを付ける。

袴止め紐は幅8cm、丈152cmの布1枚を用意して、幅を中表に置き、紐幅にしるしを付ける。

図5-5に示す。

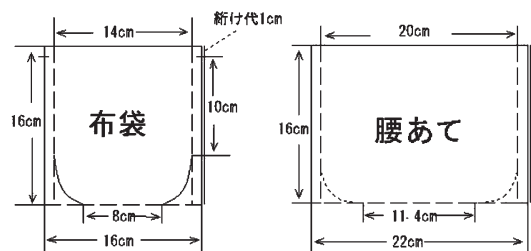


図5-5 布袋・腰あてのしるし付け

4.6 縫い方

4.6.1 袖

表袖は、中表に合わせて袖下をしるし通りに布端から布端まで縫い、前袖の方にきせ（0.2cm）をかけて折る。裏袖は、表袖と同様に縫い、前袖の方にきせをかけて折る。次に表袖口と裏袖口を中表に合わせて0.8cmの縫い代で縫い、きせ（0.2cm）を掛けて表返し、毛抜き合わせに仕上げをする。左右の袖を同様に仕上げて、図5-1のように袖幅+きせ（0.2cm）のしるしを付ける。

4.6.2 身頃

表身頃は、後身頃を中表に合わせて背縫い代1cmを縫い、衿肩明を右に持って、自分の方へきせ（0.2cm）を掛けて折り返す。左右の脇縫いを脇明と馬乗りを残して縫い、前身頃の方にきせ（0.2cm）を掛けて折り返す。衿付けを裾から衿下がりまで縫い、衿の方にきせ（0.2cm）を掛けて折る。裏身頃は、表身頃と同様に縫う。

次に表身頃の丈しるしと裏身頃の丈しるしを中表に合わせて裾合わせをし、裏身頃の裾にきせ（0.2cm）を掛けて、表身頃の裾から0.2cm控えて折りを付ける。背縫い・脇縫い・衿付けの中綴じをして、衿下、馬乗り、脇明縫いを縫う。

4.6.3 袖付け

袖付けは、表身頃の袖付け縫い代を肩山で0.4cm、袖付け止まりで0.1cm出して、袖と中表に合わせて縫い、袖の方にきせ（0.2cm）を掛けて折る。裏袖を同様に付ける。

4.6.4 衿付け

衿付けは、衿丈の中心と背中心を合わせ、肩山、衿下がり、衿先の順に左右の衿を付けて、衿の方にきせ（0.1cm）を掛ける。三つ衿芯を入れて、身頃の縫い代と斜め襷でとじて衿幅を折る。衿先を作り、裏衿を縫ける。

4.6.5 紐付け

紐付けは、幅2cm、丈45cmの紐を4本縫い、肩山より44cm下がった位置に上前および下前共に衿に1本、脇縫いの所に1本縫付け付ける。

4.6.6 袖口襷

袖口は、筒袖の袖口に襷を折りリボンで結んで細くして着用していた。襷を折るために、袖口より5.0cm入った所に1.8cm丈の糸ループを10本作製した。その中に1.2cm幅のリボンを袖下の方から通して袖山で結び飾りにする。

4.6.7 袴

4.6.7.1 前後布それぞれの縫い合わせ・裾布付け

後布の接ぎ合わせは、後布中心を中表に合わせて縫い、上を右に裾口を左に持って、きせ（0.2cm）を掛けて手前に折りを付ける。前布も同様に縫い、きせをかけて折る。次に後布と後裾布の裾縫い代を中表に合わせて縫い、裾布にきせ（0.2cm）を掛けて折り、後布の裾山から0.2cm控えて折りを付ける。裾布上部を折縫けする。前布も後布同様に裾布を付ける。

4.6.7.2 襷の取り方

後布の表を上、裾を右にして平らに開いて置く。ふところの重なり寸法1.5cmを手前の8.7cmの襷山から中央に向かって測り裾から上まで糸しるしを付ける。各襷山およびふところの折山を伸ばさないように当て布をしてアイロンで折りを付ける。

次に手前の8.7cmのしるしを中央に合わせ、ふところの重なり1.5cmの折山を中央より向こう側に出して、向こう側の8.7cmの折山を引き寄せ、中央に合わせて裏まで通して躰でおさえる。左右の襷山を中央に向かって平らに寄せ、上下の寄せ襷のしるしに合わせて置き、躰でおさえてとじる。左右それぞれに脇から9.7cmの襷山を脇のしるしに合わせて、躰でおさえる。但し、上部は2本目のひだ山から10cm幅を取り、上部から30cmの所と斜めに襷山を取り、陰襷を深くする。裏返して陰襷の山をアイロンでおさえて、全体を落ち着かせる。前布も後布と同様に襷を取り躰でおさえる。

4.6.7.3 脇縫い・見返し布

脇縫いは、前後の布を中表にして左右の脇縫いをする。右脇は上部から23cmを縫い残す。縫い残した右脇には幅3cmの見返し布を付け、布端を衿付け付ける。縫い止まりに門留めをする。

4.6.7.4 帯付け、紐付け

帯付けは、帯布の裏に芯布を綴じ付け、さらに芯の上に厚紙（帯芯）を置いて綴じ付ける。

次に袴上部のしるしと帯幅のしるしを中表に合わせてきせ（0.2cm）分浅く縫いつける。帯の左右の布端を中表に合わせてきせ分（0.5cm）浅く縫い、厚紙は出来上がりに合わせて切り、表に返して帯裏を衿付け付ける。

袴紐は幅4cm、長さ74cmに縫い、右後ろ端と上前端の帯の表に衿付け付ける。

4.6.7.5 腰あて、布袋、袴止め紐

腰あては中表にしてしるし通り縫い、表返して木綿綿を入れる。腰あての上部に袴止め紐を縫いつける。後中央の帯付けに衿付け付ける。

布袋は、三方を袋縫いにして、上部は三つ折り衿けにする。前の右脇より2番目の襷山から中央に向けて布袋の奥の口を帯付けに綴じ付ける。

完成した渡辺辰五郎考案の婦人改良服の復元の写真を写真8-1～8-12に示す。

子供服洋装化の導入と改良服に求められた機能性との関係



写真8-1 改良服 前



写真8-2 改良服 後



写真8-3 改良服 右脇



写真8-4 上衣 前



写真8-5 上衣 後



写真8-6 上衣 袖口



写真8-7 馬乗り



写真8-8 袴 前



写真8-9 袴 後



写真8-10 袴右脇



写真8-11 半襦袢 前



写真8-12 半襦袢 後

渡邊辰五郎の改良服は、着装写真からも着物の美しさを残して、機能性を追求したものであることがわかる。縫製・着装の仕方からまとめてみる。

〈上衣〉丈は長着に比べて短く裾ふきがないので、仕立てが簡単であり、着装時には動きやすい。

両脇裾には、馬乗りを明けて、幅に自由度を持たせている。筒袖は仕立てが簡単で、着装時は動きやすい。上前と下前の付け紐で前の打ち合わせを抑えているので、着装が楽である。

〈袴〉前裾は切上げを付けているが、着装時は裾線が平らになり美しく、歩きやすい。

袴の帯は幅広く、スカートのベルト付けと同様で仕立てが簡単である。後ろ腰に腰あてを付けて、扁平な腰を形よく補正している。袴が固定されるように、帯の内側に留め紐を付けている。表は付け紐で結び固定する。前右脇に布袋を付けている。女袴と比較すると、笹襷がなく、前・後共6襷で仕立て易い。脇縫いに対して、前後から襷が突合せに仕立てられている。

〈筒袖襦袢〉脇縫いは袖付けから下を体に沿わせて、繰っているため余分な皺ができず、すっきりと着装できる。

5. 子供服

婦人の改良服と同時に子供の改良服を考案したのは、山根と渡邊辰五郎だけである。

子供服に一刻も早く改良服を取り入れるべきであるという山根の考えや、渡邊辰五郎の子供服＝洋服という考えに至った明治期の子供服について写真^{(8) (9)}を示す。

明治初期において、上流階級の子供が晴れ着や外出着として身に着けるに限られていた洋服は、明治30年ころから庶民の間でも着用されるようになったようであるが、まだ一般的ではなかった。

写真9は、明治35年、兄弟の記念写真であり、女子は改良服を着ており男子は、洋服で靴を履いている。上流階級の士女と見える。写真10は、明治41年、おにごっこ的一种「子をとろ」をして遊ぶ子供たちの様子であり、全員着物を着ている。写真11は、明治44年、竹馬で遊ぶ子供の写真であり、活発な男子は、着物を短く着ているようである。写真12は、明治46年、子守りの少女たちであり、着物を大人と同じように長く着て足元は、下駄履きで子供をおぶっている。高下駄を履いている子もいる。この時代、子守りは奉公に出された子供たちの仕事であった。暑いときには、

背中 of 赤ん坊のために日傘をさしている写真もあった¹⁰⁾。写真13、14は、大正8年の小学校の卒業式の男女の写真である。全員着物姿である。記念式典であるため晴れ着を着ているとも考えられる。



写真9



写真10



写真11



写真12



写真13



写真14

子供らしく活発な様子がわかる写真だが、着物の弊害を強く感じ、山根氏のいち早く改良服を取り入れるべきであるという考えが理解できた。子供は、大人の縮小版ではないということ、子供のライフ生活に合った子供服を取り入れることが急務であると感じさせる写真である。衣服の改良も必要であるが、生活の改善も必要であると感じた。女性の地位を高めるために教育者を育てることが、女性の生活・生き方を向上させ社会を発展させることにつながると考えた、渡邊辰五郎の教育方針が納得できた。

5.1 渡邊辰五郎考案の子供服



写真15 女简单服（明治38年製作）



写真16 女简单服（明治41年製作）

写真15、16は、明治の後半に教材として製作されたワンピースの雛形である。いずれも「簡単服」とあるが、細部まで丁寧に仕立てられた女兒のワンピースである。着心地の良さや動きやすさが必要とされる子供服には、機能性に優れた洋服が積極的に取り入れられた様子がよくわかる。本学の博物館には、明治30年から大正8年にかけて製作された子供服の雛形が数多くある。

写真15、16の子供服は、雛形製作であるが、子供服にふさわしい小さな模様の生地を選んでい。また、フリル、ギャザー、レースを用いた装飾性のあるデザインや配色等を意識して製作している。子供の成長に合わせて丈を調整できるように工夫もしてある。1着の雛形製作は、機能性や縫い方を学ぶほかにファッション性も学ぶことができるものである。渡邊辰五郎は、教員を育てることで洋服・子供服を普及させようとしていたのではないかと、さらには女性が自らの力で社会を変えていくことができることを期待していたのではないかと考えられた。

6. 考 察

女服改良に関する論議と、考案された改良服は多数に及ぶが、その中で一番顕著なものと推測できるものは、渡邊式と山根式であると考えられた。両者の改良服の構成の違いについて述べる。

山根式改良服の特徴を次に示す。

- ①上衣丈は、腿の半ばより少し上までとする。
- ②袴の丈は膝下が理想で、地にひくようなものは、不衛生でよくない。又、胸にかからぬようになるだけ低く着用すること。
- ③身頃の背、両脇、前（左衿の中程）のボタンは、袴をつるためのものである。
- ④上衣の打ち合わせに紐をつけたが、ボタンでもよい。
- ⑤袴は右明きで、行燈袴にして裏を付け、折り目（プレスされたプリーツ状ではなく、タック風なもの）を付ける。
- ⑥袴の裾にある2、3段の縫い上げは、身体の成長につれて丈を伸ばすためのものであり、同時に装飾をかねている。
- ⑦上衣と袴の境目には、革の帯をする。しごきの場合は、後ろで蝶結びとする。これらは、装飾であるので胴をあまり締めないように注意する。
- ⑧頭髮は、束髪、あるいは、下げ髪とし、よく洗って清浄に保ち、就寝時は、解いて休むことが理想である。
- ⑨帽子は、保護と装飾を兼ねてかぶることが望ましい。
- ⑩足には、靴下をはき、運動しやすいように軽い靴を履く。

裁断は、図6、図7に示すように並幅を用いた直線裁ちであるから、着物裁断の感覚で容易に理解できる。縫製の段階では、従来の着物よりやや立体的に構成され洋服型に近づいている。

図6は、並幅の布を用いた女改良服の裁ち方であり、図7は、10歳くらいの女兒改良服の裁ち方を示したものである。

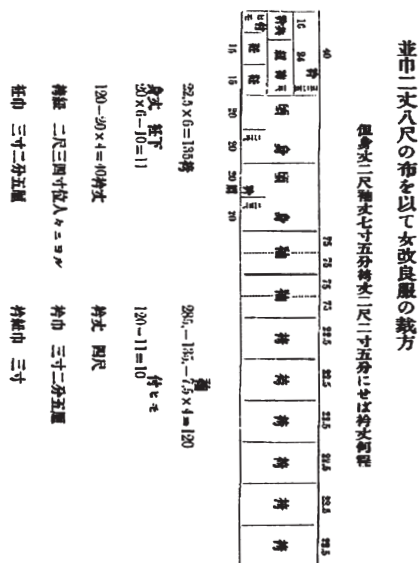


図6 女改良服の裁ち方

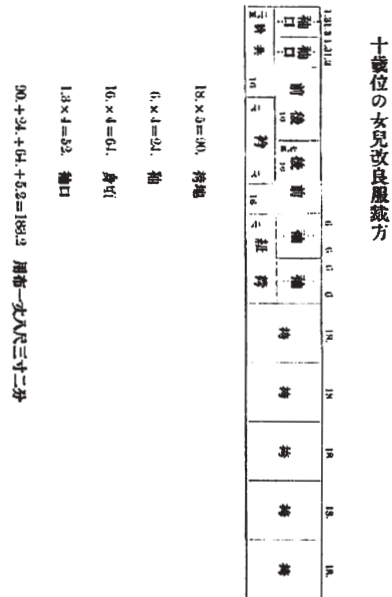


図7 女児改良服の裁ち方

渡邊式と山根式改良服の類似点については、次の7点が考えられた。

- ①着物風の上衣と、行燈袴風な下衣よりなる2部形式である。
- ②裁断法は、並幅（山根式は、この幅に限っている）または、2尺幅を持つての従来の着物の裁ち方に準じたものである。
- ③上衣の袖は両者とも筒袖で、袖口はやや細く絞っている。
- ④上衣の打ち合わせには、衿先と脇に結び紐をつけてある。
- ⑤上衣の着装にあたっては、和装の着装形式と同じく衿元に半衿をのぞかせている。山根式は、衿は純白が良いと推奨し、渡辺式は衿もとを2重に見せている。
- ⑥袴は、いずれも右明きとなっている。
- ⑦両者とも、この上に羽織る改良被布を合わせて発表している。等があげられた。

また相違点として次の5点を示す。

- ①上位丈は、山根式が腰を覆う程度の長さ・断ち切り身丈2尺（76cm）に対し、渡辺式は、1尺3～4寸（約50cm）と短めである。
- ②袴丈は、山根式は、断ち切り2尺2寸5分（85cm、出来上がりは、80cm前後と推定）、渡邊式は、2尺6寸～7寸（約102cm、出来上がり丈は、前中央で約91cm）と長めである。
- ③袴の造り方は、山根式は折り目を付けず、タックド スカート風な形式であるのに対し渡邊式は、裾まで折り目を付けたものである。前者は、袴丈の6倍で構成できるが、後者は8倍を要する。いずれも並幅の場合で総要尺に関係してくる。
- ④総要尺は、山根式2丈8尺（960cm 並幅）、渡邊式3丈1尺8寸（1,208cm）となる。
- ⑤素材については、山根式は特に経済性を考慮して日本の織物を利用することを強調したが、渡

邊式は2尺幅物を主題とし、キャラコの更紗、メリンス、紋毛儒子、カシメル、絹セル、アルパカなど舶来ものも用いた。等があげられた。

渡邊式と山根式改良服の相違点から、山根は、明治・大正年間における医療行政家であり、また医学教育家でもあったので、着物の弊害を強く主張し、改良服をいち早く取り入れたいという考えに立っていたことがわかる。渡邊は、教育者で教員を育成することを目的にしていたため教材の中に取り入れ、これらを学んだ教員が改良服を普及させることを考えていたようであると推測できた。

6. まとめ

衣服改良運動がおこった時期は、日本の近代化が急速に推し進められた頃で、衣服に限らず社会の各分野にわたって改良運動の気運が満ち溢れていた。

衣服改良については、渡邊も山根も理論と実践の両面から取り組んだが、明治期においては、あまり普及させることができなかった。日本人にとって必要性を感じた生活がなされていなかったこと、また、保守的な考えにより新しいものを受け入れることができなかったこと等に原因があったと考えられる。産業革命が完了し、女子労働者が増加して、生活服や労働服としての女子の服装が必要とされたときに、改良服は活躍するであろうと思われた。しかし、「衣服の近代化」は、洋服の普及によって果たされ、改良服は姿を消すことになる。だが、明治後期に出現を見た改良服は、人間の機能性のある服を求める意識を育てたことに衣服改良運動の役割の重要性を感じた。さらに、日本において女性服装史上における生活服の原点であると考えられた。

今後は、現代のライフスタイルにあった子供服を安心・安全の面から追求し研究していきたいと考えている。

この論文は、生活科学研究所総合研究プロジェクトにより行った一部である。

参考文献

- 1) 夫馬佳代子：衣服改良運動と服装改善運動：東京，家政教育社，2007，p.8, 9, 10.
- 2) 三友晶子，太田八重美（編集）：重要有形民俗文化財指定10周年記念 渡辺学園裁縫雛形コレクション：東京，東京家政大学博物館，2010.
- 3) 山根正次：増補第3版 改良服図説，東京，東京印刷（株），1904，p.8～20.
- 4) 渡邊辰五郎：婦人改良服指南 全，東京，東京裁縫女学校 同窓会，1904.
- 5) 渡邊茂：渡邊先生遺稿 新裁縫教科書，東京，東京裁縫女学校，1909.
- 6) 渡邊辰五郎：渡邊先生遺稿 渡邊裁縫講義高等部，東京，東京裁縫女学校，1911，p.293～328.
- 7) 重要有形民俗文化財「渡辺学園裁縫雛形コレクション・下巻：東京，東京家政大学博物館，2001，p.51, p.197.
- 8) 下川耿史：近代子供史年表，東京，川出書房新社，2002，p.228, 262, 283, 288.
- 9) 小泉和子：昭和のキモノ，東京，川出書房新社，2006，p.17.
- 10) 小沢健志：写真で見る幕末・明治，東京，世界文化社，2000，p.169.